



TITLE:

價格指數に就て

AUTHOR(S):

汐見, 三郎

CITATION:

汐見, 三郎. 價格指數に就て. 經濟論叢 1922, 15(6): 933-944

ISSUE DATE:

1922-12-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/127966>

RIGHT:

京都市帝國大學經濟學會 經濟論叢

第五十卷 第六號

大正十一年十二月一日發行

論叢

相續税に於ける特殊累進に就きて

法學博士 神戸 正雄

勞農露國の農業

法學博士 河田 嗣郎

マルクス氏の集産主義の實行難を論ず

法學博士 田島 錦治

基督教文明の發展概論

法學博士 財部 靜治

經濟道と經濟術

法學士 作田 莊一

資料

中央市場論并に食料品配給費研究

法學博士 戸田 海市

說苑

リストと歴史派經濟學

法學士 山口 正太郎

我國の都市及地方に於ける婚姻の統計的觀察

經濟學士 岡崎 文規

雜錄

無責任なる翻譯の一例

法學博士 河上 肇

原田學士譯ボーリニー經濟學原論

經濟學士 小川 福太郎

價格指數に就て

法學士 沙見 三郎

附錄
本誌第十五卷總目錄

價格指數に就て

— 沙見三郎

物價騰貴は、我が國民經濟を通貫せる顯著なる現象である。苟も我が國民經濟を云々する以上は、どうしても此問題を看過する事が出来ない。従つて、あらゆる方面よりあらゆる方法を用ひて物價騰貴の現象を明にする事は、總ては國民經濟の真相に觸るゝ所以である。

物價の變遷を研究するに當り、最も重要な材料は物價指數である。今、明治二十年一月を基準とする日銀舊指數と明治三十三年十月を一〇〇とする日銀新指數とによると、最近三十六

年間と云ふものは——多少の例外を除き——我が物價は常に騰貴の趨勢を辿りつゝあると云ふ事が出来る。これ第一圖表の示す所である。

第一表

日銀舊指數		日銀新指數	
明治二十年一月	100.00	明治三十三年十月	100.00
同二十一年平均	102.00	同三十四年平均	102.00
同二十二年平均	103.00	同三十五年平均	103.00
同二十三年平均	104.00	同三十六年平均	104.00
同二十四年平均	105.00	同三十七年平均	105.00
同二十五年平均	106.00	同三十八年平均	106.00
同二十六年平均	107.00	同三十九年平均	107.00
同二十七年平均	108.00	同四十一年平均	108.00
同二十八年平均	109.00	同四十二年平均	109.00
同二十九年平均	110.00	同四十三年平均	110.00
同三十年平均	111.00	同四十四年平均	111.00
同三十一年平均	112.00	大正元年平均	112.00
同三十二年平均	113.00	同二年平均	113.00
同三十三年平均	114.00	同三年平均	114.00
同三十四年平均	115.00	同四年平均	115.00
同三十五年平均	116.00	同五年平均	116.00
同三十六年平均	117.00	同六年平均	117.00
同三十七年平均	118.00	同七年平均	118.00
同三十八年平均	119.00	同八年平均	119.00
同三十九年平均	120.00	同九年平均	120.00
同四十一年平均	121.00	同十年平均	121.00
同四十二年平均	122.00	同十一年十月	122.00

而して物價騰貴の大趨勢の此間にありて、比較的に急激の變化を示してゐる時期を大體三つ數へる事が出来る。明治二十七八年前後と同三十七八年前後、そして大正三年より最近に至る時期である。何れも戦争を中心としてゐるが、特に世界大戦争を中心とする最近の物價騰貴は最も注目すべきものである。

世界戦争を中心とする物價の變動は大正四五年頃より始まる。而して大正九年三月には其絶頂に達し、當時の日銀物價指數總平均は實に四二五にしてかの戦前大正三年の一・二六の約三倍半に當るのである。其後又下落の歩を辿り、最近大正十一年十月に於ては二五二の數字を示し、大正三年の二倍見當にして大正九年三月の六割である。物價の變動は、其結果として、之を喜ぶ若干の人と之を悲しむ幾多の人とを出だすのである。殊に最近數年間の暴騰暴落相ついで起るが如き際にありては、人の心を不安ならしむる事幾何たるかを知らない。然し經濟現象を研究する私等にとつては、此不安の時期こそ又と

得難き研究の好機會である。物價變動の生きた實驗が目前で行はれてゐるからである。物價の研究特に價格指數の研究を、専ら大正三年以後の動搖多き此時期に限つたのは、全く此理由に基く。

二

物價の變動を研究するに當り大體二つの立場が分れる。一は百般の貨物の物價を包括的に調べる見方であつて、他は箇々の貨物の價格を明にせんとするのである。前者は凡ての貨物を一まとめにし、是と貨幣とが如何なる交換比にあるかを調べんとする綜合的研究である。貨幣の購買力の測定と呼べるゝ方法である。後者は、各種の貨物が其相互の間に於て如何なる交換比を有するかを明にする箇別的方法である。貨幣の購買力を測定するには物價指數の總平均を用ふべく、又貨物相互の交換比は物價指數總平均の構成分子たる各品目の指數により之を知る事が出来る。私の所謂價格指數の研究は、箇々の貨物相互間の交換比を明にするに存し、従つて

各貨物の指數が必要となるのである。

各品目の指數を調ぶるに當り、其凡てを一々羅列するのも一方法であるが、かくては木を見て森を見ざるの弊を伴ふを免れない。従つて日銀指數を研究するに當りても、之に適當の分類の考案せられし分類を採用して置く。南氏は日銀卸賣新指數の五十六品目を、次の如く分類してゐられるのである。

穀	物	〔米、大麥、稷麥、小麥、大豆、小豆、小麥粉〕
食料品嗜好品	〔砂糖、製茶、鹽、味噌、醬油、酒、饅頭、鰯卵、刺身、西洋菜〕	
纖維工業品	〔生絲、羽二重、絹手巾、甲斐絹、絹、絹地、貝綿、縮絲、白木綿、金巾、線綿、麻、フランネル、毛斯綿、毛織子〕	
金屬類	〔洋鐵、洋釘、銅〕	
燃料	〔石炭、油、石油、炭、薪〕	
建築材料	〔木材、石材、煉瓦、瓦、セメント〕	
特殊工業品	〔藍、硝子板、日本紙、洋紙、皮革、肥料、糠、魚肥、油、糟〕	
肥料	〔肥料、糠、魚肥、油、糟〕	
雜品	〔蠟燭、生漆、木蠟、燐寸〕	
總平均		

南氏の此分類を標準として、日銀物價指數を

穀物、食料品、纖維工業品、金屬類、燃料、建築材料、特殊工業品、肥料、雜品に大別した。

第二表は、此標準に基き大正三年乃至最近の數字を二ヶ月置きに算定したものである。

第二表

[illegible]

[illegible]

大正四年二月					大正八年十二月				
二月	三月	四月	五月	六月	十二月	一月	二月	三月	四月
二六	二七	二八	二九	三〇	二五	二六	二七	二八	二九
二六	二七	二八	二九	三〇	二五	二六	二七	二八	二九
二六	二七	二八	二九	三〇	二五	二六	二七	二八	二九
二六	二七	二八	二九	三〇	二五	二六	二七	二八	二九
二六	二七	二八	二九	三〇	二五	二六	二七	二八	二九
二六	二七	二八	二九	三〇	二五	二六	二七	二八	二九
二六	二七	二八	二九	三〇	二五	二六	二七	二八	二九
二六	二七	二八	二九	三〇	二五	二六	二七	二八	二九
二六	二七	二八	二九	三〇	二五	二六	二七	二八	二九

第二表を審に調べると、物價變動に關する概括的の議論なるものには少しく修正を加ふる必要がある様に思はれる。物價騰貴と云へば、物價指數の總平均と共に各種の貨物の價格が殆んど同一比例で上下するが如く議論する人が可成あるが、事實はそうはなつてゐない。總平均の變動と同時に起る各品目の價格の上下なるものは千差萬別である。

三

物價指數の總平均と各品目の價格との間には、騰落の遲速、變化の大小等に差異のある事は、第二表によつて明であらう。更に品目の價格は物價指數の總平均を中心として上下に如何なる割合を以て分配せられてゐるかを調べねばならぬ。此目的を達する爲めに、物價指數總平均を一〇〇とし、各貨物の價格がそれに對し如何なる割合を占むるやを算定したのである。第三表がこれである。

第三表

雜 錄	大 正 五 年						大 正 四 年						大 正 三 年						
	十 二 月	十 一 月	十 月	九 月	八 月	七 月	十 二 月	十 一 月	十 月	九 月	八 月	七 月	十 二 月	十 一 月	十 月	九 月	八 月	七 月	
穀物	△ 101	△ 101	△ 101	△ 101	△ 101	△ 101	△ 101	△ 101	△ 101	△ 101	△ 101	△ 101	△ 101	△ 101	△ 101	△ 101	△ 101	△ 101	穀物
食料品	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	食料品
工業品	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	工業品
金屬類	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	金屬類
燃料	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	燃料
建築材料	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	建築材料
特殊工業品	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	特殊工業品
肥料	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	肥料
雜品	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	雜品
總平均	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	△ 100	總平均

價格指數に就て

第十五卷 (第六號一四五)

九三九

(前々月増+減△比較)(×増減なし)

[illegible]

最高と最低との數字をゴチツクにて示し、二ヶ月以前との増減比較を試みて置いた、非常な

最近の數字大正十一年十月の物價指數をとる。總平均は二五二である。然るに總平均二五二なる指數は大正七年七月にも之を求める事が出来るのである。議論を單に貨幣の購買力なる概括論に止むるならば、大正七年七月と大正十一年十月とは同じ物價事情である譯である。蓋し總平均が同一なるが故である。然れども更に

問題を進めて總平均を形成する各品目の價格即ち價格指數に及ぼすと、此兩期の物價事情には

大變動あるを思はしむるのである。次の數字は此事を明に示してゐる。

大正七年七月	穀物	食料品	纖維	工業品	金屬類	燃料	建築材料	特殊工業品	肥料	雜品	總平均
三六	三三	三四	三三	三三	三三	三〇	一四	三六	一五	三七	三三
大正十一年十月	三四	三〇	三三	三三	三三	二九	一〇〇	二九	一〇三	二九	三三

物價總平均を標準とし水準以下の指數をゴチックにて示すと、かくの如き大變化がある。此四年を隔つる二期間に於ては、單に總平均を共通にする云ふに止まり、何れの貨物と雖も、

同一價格を維持してゐるものがない。更に問題に明確ならしむる爲めに、總平均を一〇〇として相對數を算出した。

穀物	食料品	纖維	工業品	金屬類	燃料	建築材料	特殊工業品	肥料	雜品	總平均
大正七 年七月 順序	第三	第七	第六	最高	第四	最低	第二	第八	第五	一〇〇%
大正七 年十月 順序	第六	第二	第七	最低	第四	第三	第五	第八	最高	一〇〇%

大正七年に於て最高の地位を占めし金屬が大

なるが如きも注目すべき事實である。

正十一年には最低に下り、大正十一年の最高の雜品は大正七年にありては第五位を占むるに過ぎざりし如き、大なる變化の跡を見る事が出来る。大正七年には水準を越ゆる事一割なりし穀物が大正十一年には物價平準を下る事一割五分

更に各品目の價格が如何なる傾向にありやも大に考慮する必要がある。大正七年七月は景氣の上向の時であり、大正十一年十月は下向の時である。従つて貨物の中騰貴の傾向にあるものと下落の趨勢を辿るものとの間に種々の差別が

存してゐるのである。

要するに、次の事實を結論する事が出来る。

一 物價指數の總平均同一なるも、箇々の貨物の價格の相互關係は變り得るものである。

二 反對に、總平均が異なるも、各貨物の價格の相互關係が同一なる事もあり得るのである。

三 更に、同一の總平均、同一の價格組成分子であつても、景氣の向上と下向とにより各貨物の價格に變動の可能性の強弱がある。

以上の事實を調ぶるに當り、私は總平均を一〇〇とし、他の各品目の價格が總平均に占むる割合を別に算定し、以て物價平準の上下に各價格が如何に配列せられてゐるかを調査したのである。物價指數が其總平均を重きを置き利用せらるゝに對し、各品目の價格が總平均に占むる割合の指數は箇別的なる特色を有してゐる。これ物價指數なる言葉の外に價格指數なる名を附したる所以である。物價なる語は、山崎博士の云はるゝ如く、複數なる事に意味を有し、かの單數を示す價格と相對立してゐるのである。貨

物の世界を一括して貨幣の世界に對立せしめんとする所に物價指數の總平均の意味が存してゐる。これ總平均に重きを置く指數に所謂物價指數の名のふさわしき所以である。之に反し貨物の世界の各部分を貨幣の世界に對立せしめ以て貨物の世界内部の相互關係を明にする指數に價格指數の名を附するのも、決して不穩當の事ではあるまい。

五

物價政策を分ちて、生産者保護政策と消費者保護政策とする人がある。前者は物價騰貴を敢て辭せざる政策にして、後者は物價引下を中心とする政策である。その意味する所は次の如くである。生産者は其收入を貨物に求むるを以て物價騰貴の際には收入も増し従つて生活安易である。之に反し、消費者階級にありては貨幣が其唯一の收入源なるが故に、物價騰貴即ち貨幣の購買力の下落は生活の安定を脅かし、物價下落即ち貨幣の購買力の騰貴は生活を安定せしむると云ふのである。而して論者は兩階級の利害

衝突を議論の中心とするが故に、常に物價指數總平均のみが問題の焦點となるのである。

翻つて考ふるに、現經濟社會に於ては果して純然たる生産者と純然たる消費者とが、城壁を高くして嚴然相對してゐるのであらうか。或は論者の所謂「消費者」と所謂「生産者」との間に幾多の中間階級存し、彼等の手によつて始めて社會の經濟活動がなされてゐると考へるのが寧ろ正當で無からうか。假に消費者と生産者とが明瞭に相分ち得るとするも、少くとも生産者内部の物價問題は指數の總平均のみで解決出來ない事は明なる事實である、穀物生産に従事する人、纖維工業に従事する人、其他各種の生産業に従事する人は、物價指數總平均の問題以外に、其生産物が如何なる價格指數を有するかにより重大なる影響を受けるのである。況んや、現經濟社會に存在する各員は、程度の差こそあれ、生産者たる資格を具へ、且つ生産者利益と可なり密接なる關係を有するのであるから、問題は自ら異らざるを得ないのである。物價の變動を論ずるに當つても、總平均より一步を進め價格指數に及ぶ事が、生産物消費者の全般にとつて重

要なる問題である。これ恰も國民所得を論ずるに際し總額の増減の問題に止まらず更に進んで分配の問題にも入らねばならぬと同様である。

上述の統計材料によるに、物價總平均が同一の場合にも價格指數の内容が非常に區々たる事實がある。同一物價指數總平均の下に於ても、景氣が固定せりや、上向にありや、下向にありや、更に當時の物價變動の度が大なりや、小なりやにより、總平均を組成する價格指數は非常に異つて来る。物價一割下落せりと云ふ事は、決して各品目の物價凡て一割下落せりと云ふにあらず、絶對數に於ては騰貴せるものあり。保合のものあり。又下落せるもの、中にても一割以上のもの一割以下のものも存し、結局算術平均的に見て一割減なる數字が總平均に現はれたるに過ぎない。

物價調節の問題を論ずるに當りても、單に物價指數の總平均に着目するに止まらず、總平均の構成分子たる各貨物の價格の相互關係の内容に立ち入る必要がある。此目的の爲めには、私の所謂價格指數なるものも相當の意義を有してゐるものと云ふ事が出来る。